
外国語教育研究

Foreign Language Institute

センター年報

2010年度



金沢大学外国語教育研究センター

目 次

巻頭言	1
スタッフ	2
組織／共同プロジェクト	3
2010 年度事業報告	
日誌／FD 出張日誌／外部資金獲得研究／スタッフの出版物	4 - 5
講演会	6 - 7
研究会	8 - 9
教育改善事業／e-learning 活動／英語の特設プログラム	10
検定試験・検定模擬試験	11
留学支援事業	12
社会貢献事業	13
その他の活動	14
センター刊行物／購入語学教材	15
教材紹介	16

外国語教育法について

センター長

澤田茂保

外国語教育には昔から様々な方法があった。古くはローマの時代にギリシアの古典を読むために考案された方法がある。ローマ人にとって話すことを目標にした外国語学習はない。ギリシア語をしゃべる人は金を払えばどこにでもいたからである。習得の対象はギリシア語の古典を読んで正しく理解する能力であった。いまでは文法訳読法という名を持つこの教授法は、簡単に言えば、外国語の知識を「語」と「語の配列規則」の知識に還元して教える。その効果は絶大で、読むことを目的とするときの有効性は歴史的に証明されていると言える。

日本でも海外との行き来がほとんどない時代は、外国語の能力とは外国語で書かれたものを理解できる能力であり、それは「知識」の多寡に比例していた。だが今日では、このような意味で外国語能力を見る人はなく、相手がいる場面の中で外国語を使う能力、あるいはコミュニケーションの能力として見なされている。外国語の能力＝場面内外国語運用力となって、子供の母語獲得が注目された。「使う」という点で大人が四苦八苦することを子供が難なくしているからである。だが、その探求の道はなかなか険しかった。

実のところ、母語でも外国語でも、ことばを使う力は知識に還元できず、実態がよく分からない。実態が分からないからこそ、その能力を養成するためにと、ありとあらゆる教育法が考えられた、といってよい。○○メソッド、○○アプローチといろんな方法が考案された。しかしながら、どれにも流行があり、次には必ず衰退があった。万古不易の教育法がどこかに存在して、我々はそれをまだ発見していないだけなのだろうか？ふと浮かぶ疑問である。

第二言語習得分野にMethod Studiesという研究がある。異なった二つの教育方法を比較し、どちらが有効なのかを探る研究である。単純化して言えば、読むために文法の教育を重視するX法で教えたA群と場面でのインタラクションに重点を置いたY法で教えたB群があるとしよう。3ヶ月間それぞれの方法で教育をほどこしたら、なるほどA群の学習者は読み書きでB群の学習者に有意差があるが、聞いたり話したりする能力はB群の学習者より有意に低かった。この結論は当然であろう。教育を施した能力が秀でて、重点を置かなかった分野の能力が低いのは当たり前である。だが、Method Studiesで極めて面白い結果は、X法であれ、Y法であれ、3年とか5年とか長く続けると、それぞれの技能における有意差は消えていた、というのである。つまり、どのような教授法を採用しても、対象言語を長く学び続ければ、アウトカムの差とはならない、というのである。ことばという存在の多面性とそれを学ぶ行為の本質をつく結果だと私は思う。というのは、たとえ読むことを中心に教わっても、真の意味で外国語の習得を目指す者は、音読を繰り返し、学んでいる言語で表現したりと、「使う」ことの基礎訓練を無意識のうちに行うのだろう。他方、コミュニケーションなど経験ベースの教育であっても、やはり外国語に関心の高い者は、原書で書かれた小説を読みたい、などと自然に思う。すると、コミュニケーション技術を学びながらも、語彙を増やし、文法構造を意識した学習を無意識に行っているに違いないからである。

どの分野にも特定の知識や技能を教える効率的な方法があるように、外国語教育でもある目的に特化すれば確かに効果的な教育法は存在する。しかし、言語というのは多様な存在である。その多様な存在としての外国語を学ぶという目標には、万能の効果が期待される夢のような教育法はどこにも存在しないのである。もしそうなら、特定の教授法を墨守したり、存在しない万能メソッドを探し求めたりすることよりも、ずっと大切なことがあると思う。それは、いかにして学びを持続させる動機を学習者に対して与えるか、ということである。

スタッフ

英 語

John Ertl (ジョン・アートル) 准教授
文化人類学

大藪 加奈 (おおやぶ かな) 教授
英語文学、英語教育

数見由紀子 (かずみ ゆきこ) 准教授
英語学・言語学

小林恵美子 (こばやし えみこ) 准教授
コミュニケーション学、日米比較文化論

澤田 茂保 (さわだ しげやす) 教授
英語学・言語学

西嶋 愉一 (にしじま ゆいち) 准教授
自然言語処理

根本 浩行 (ねもと ひろゆき) 准教授
社会言語学

John Bintliff (ジョン・ビントリフ) 教授
英語教育、英米文学

結城 正美 (ゆうき まさみ) 准教授
アメリカ文学・文化、環境文学

渡邊 明敏 (わたなべ あきとし) 教授
ユートピア思想史・デザイン史

ドイツ語

佐藤 文彦 (さとう ふみひこ) 准教授
近現代ドイツ・オーストリア文学

Sven Jakobowski
(スヴェン・ヤクボフスキ) 准教授
社会学・マスコミ

フランス語

三上 純子 (みかみ じゅんこ) 教授
フランス文学

Emmanuel Antier
(エマヌエル・アンティエ) 准教授
言語文化教授法、フランス語教育

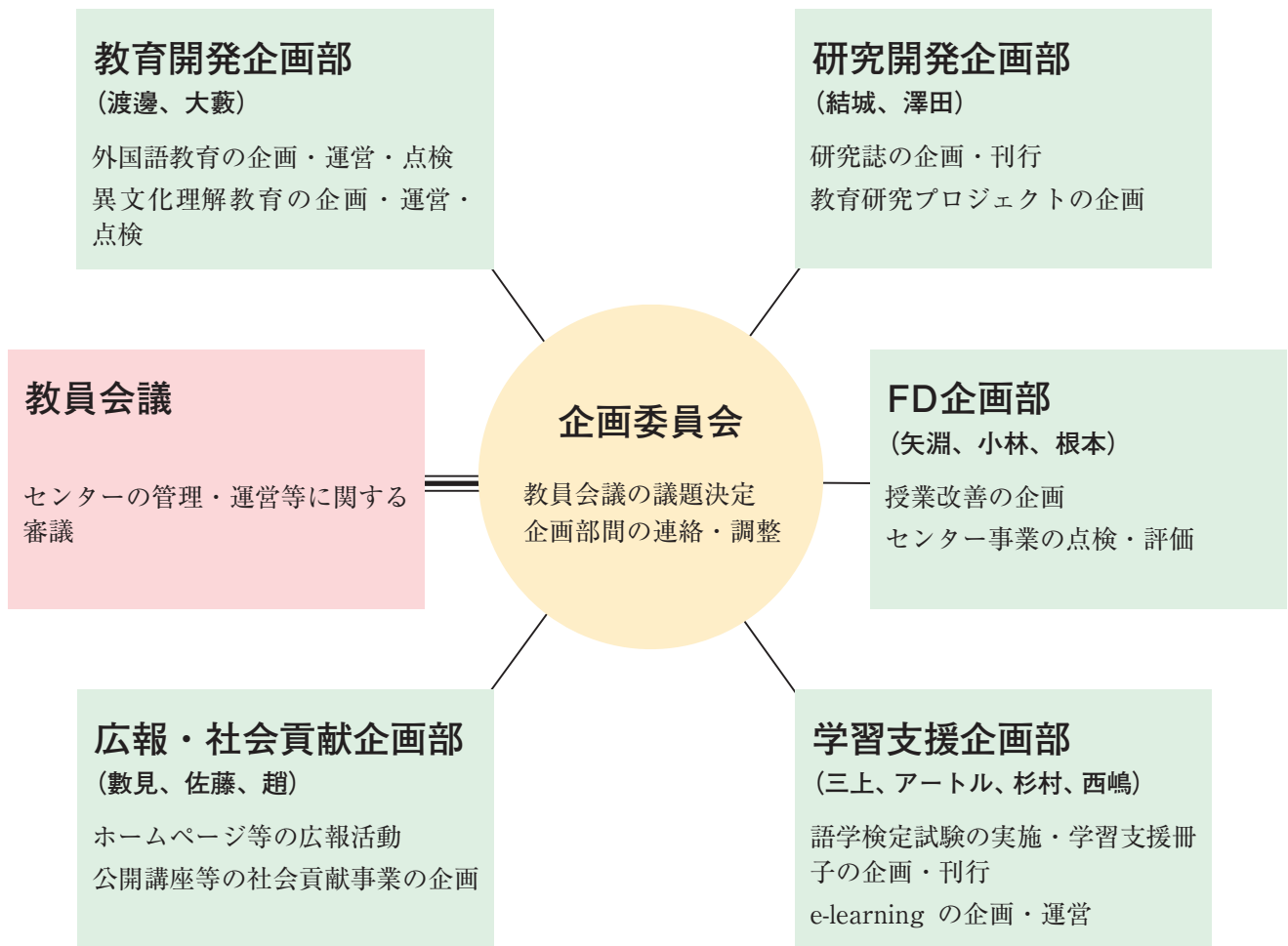
中国語

杉村安幾子 (すぎむら あきこ) 准教授
中国現代文学

趙 菁 (ちょう せい) 准教授
日本語学、日中言語比較

矢淵 孝良 (やぶち たかよし) 教授
中国古典文学

李 慶 (り けい) 教授
中国古典文学・文献学



プロジェクトA

大藪、アートル、數見、佐藤、三上、結城

プロジェクトAでは、金沢大学言語科目における到達目標の明瞭化と、厳正な成績評価の実現にむけた研究を行っています。今年度は、CEFR（ヨーロッパ共通言語参照枠）を中心に研究し、授業の到達目標が学生のレベルや将来の目標と合致しているかを調べました。金沢大学版CEFRレベル表を使い、英語科目を履修している学生に英語力自己判断アンケートを行ったほか、初習言語に適したアンケート作成に向けた研究も行いました。
(大藪加奈記)

プロジェクトB

矢淵、小林、澤田、杉村、趙、西嶋、根本、渡邊

今年度のプロジェクトBは、チーム全体として十分な活動ができませんでした。ただ、中国語関連では、2011年度からの「中国語A」統一教材として『アカンサス初級中国語』を編集しました。次年度以降は、e-learningを含む教材開発、試験方法・問題の開発、TOEICを中心に外部試験の効果的な活用方法等について検討し、具体的な作業に着手したいと考えています。
(矢淵孝良記)

2010年度事業報告

目 誌

- 2010年** 5月25日 第1回研究会「TTT（TOEIC指導者研修）から考える、教室内活動と教材分析の
実践」
- 6月2～11日 ランチョンセミナー・外国語学習特集（朝鮮語、フランス語、中国語、ドイツ語、
ラテン語、英語）
- 16～17日 フランス語検定模擬試験
- 22日 第2回研究会「学生中心の授業作り－授業参観とクリッカー－」
- 27日 第71回中国語検定試験
- 7月13日 第3回研究会「派遣留学の現状と課題－教職員向け派遣留学説明会－」
- 9月18日 TOEFL-iBT
- 11月8日 講演会「CEFRを適用した外国語教育の実践－カンボジアの言語状況とカンボジア
工科大学のカリキュラムについて－」
- 17～18日 フランス語検定模擬試験
- 23日 2010年度秋期ドイツ語技能検定試験
- 28日 第72回中国語検定試験
- 30日 第4回研究会「CEFR表を使った語学授業レベルのアンケート」
- 2011年** 2月11～12日 英語指導力開発ワークショップ
- 2月20日 TOEFL-iBT
- 22日 講演会「CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の理念と実践－言語教育における複
言語主義と語学ポートフォリオの活用－」
- 3月26日 TOEFL-iBT
- 27日 第73回中国語検定試験
- 末日 『言語文化論叢』第15号、『外国語教育フォーラム』第5号、『センター年報(2010年度)』
発行
- 末日 『英語学習ハンドブック』、『初習言語ガイドブック』、『英語力をのばしたい皆さん
のための英語Ⅱ／英語Ⅲ授業案内』発行

FD出張日誌

- 2010年** 5月28日 日本フランス語教育学会2010年度春季大会（三上）
- 7月2～9日 第35回ALAA応用言語学会（根本）
- 8月12～19日 ドイツ学術交流会（DAAD）主催「Bonner Sommerseminar für Ortslektorinnen
und Ortslektoren weltweit. Bonn: Nach Berlin. Landeskundliche Inhalte mit web
2.0」（ヤクボフスキ）
- 9月2～4日 Théodile-CIREL主催「University literacies: Knowledge, Writing, Disciplines」（ア
ンティエ）
- 9～11日 Eurocall主催「Languages, cultures and virtual communities」（アンティエ）
- 10月6～7日 日本フランス語教育学会2010年度秋季大会（アンティエ）
- 11月5日 大学のグローバル化と複言語主義国際研究集会2010（大藪）

- 2011年 2月11～13日 第7回TOEICテストスコアアップ指導者養成講座（西嶋）
 26日 慶應義塾大学外国語教育研究センター「行動中心複言語学習プロジェクト2006－2010研究成果最終報告会」（三上、佐藤）
 3月4日 広島大学外国語教育研究センター第20回外国語教育研究集会（澤田）
 11～12日 プリティッシュ・カウンスル主催「Going Global 2011」（結城）

外部資金獲得研究

◎資金の種別、年度、研究課題名、研究者名の順で示してあります。

新規

科学研究費補助金 基盤研究（C）、2010－2012年度、

「日米大学生の飲酒、喫煙の動機付けと抑止要因：分化的強化と拡大抑止理論の検証」、小林恵美子
 科学研究費補助金 基盤研究（C）、2010－2012年度、

「新しい文法教育のためのリアル・タイムと場面の制約のある言語形式の基礎的研究」、澤田茂保
 金沢大学重点戦略経費、2010年度、

「オンライン異文化学術ネットワークを用いた第二言語リテラシー習得研究」、根本浩行
 金沢大学重点戦略経費、2010年度、

「食の文学における環境観の比較研究」、結城正美

継続

科学研究費補助金 基盤研究（C）、2009－2011年度、

「交渉教育理論を適用した英語教育の教材開発研究」、數見由紀子（代表者）、大藪加奈、ジョン・アートル
 （以上、本センター所属）、東川浩二（金沢大学法学系）

科学研究費補助金 若手研究（B）、2009－2011年度、

「江戸時代の養生論の現代的意義に関する研究－国学者の養生論における養生と教養の関係」、趙 菁
 科学研究費補助金 若手研究（B）、2008－2010年度、

「キャリア形成に向けた論理的英語運用能力の研究」、根本浩行

科学研究費補助金 萌芽研究、2008－2010年度、

「日中両国の相互理解を育む教材・副教材の開発に向けた基礎研究」、矢淵孝良

スタッフの出版物

結城正美『水の音の記憶—エコクリティシズムの試み』
 （水声社）2010年6月30日発行

杉村安幾子／趙菁／矢淵孝良『アカンサス初級中国語』
 （金沢電子出版）2011年3月20日発行



講演会

CEFRを適用した外国語教育の実践

— カンボジアの言語状況とカンボジア工科大学のカリキュラムについて —

リティ・ブルム（カンボジア工科大学教員）（2010年11月8日）

2010年に当学と協定を結んだカンボジア工科大学 Institut de Technologie du Cambodge (ITC) はソビエト連邦の協力のもとに開校した大学だが、のちにフランスが受け継ぐ形になりフランス、カナダ、ベルギーなどに仏語圏に多くの協定校をもつ。授業の90%以上がフランス語でなされているため、入学時には全くフランス語力ゼロの学生が大多数であるが5年間で欧州言語共通参照枠（CEFR）のB2レベルまで教育するカリキュラムをたてている。卒業生は、同じく金沢大学と協定を結んでいるアンコール遺跡整備公団をはじめカンボジアの各所の重要な部署で活躍している。

同校のフランス語教育の専門家リティ・ブルム先生が来沢され、11月8日に総合教育1号館大会議室で「CEFRを適用した外国語教育の実践—カンボジアの言語状況とカンボジア工科大学のカリキュラムについて—」と題した講演を行った（外国語教育研

究センター・金沢大学国際交流本部・国際学類主催）。

当初はフランス語による講演を逐次通訳する予定であったが、聴講された当学の先生方の構成から英語の方がよいと判断されると、ブルム先生は問題なく英語で御講演いただき、結局通訳は不要であった。

フランス語教育についてのお話であったが、大学授業が聴講でき専門書が読めるレベルまで短期間で教育するため独自の教科書を作成し、理解度の低い学生には昼休みを割いて補習を行うなどの工夫は、当学の英語教育を担当される先生方にも大いに参考になったと考えられる。

同日夕方はささやかながらブルム先生を囲む会をもうけ、また翌日には国際学類・粕谷雄一教員によるフランス語の授業（媒介言語：英語）をブルム先生にご参観いただいた。（粕谷雄一記）



講演会

言語教育における複言語主義と語学ポートフォリオの活用 —CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の理念と実践—

西山 教 行（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）

福島 祥 行（大阪市立大学大学院文学研究科教授）（2011年2月22日）

2011年2月22日、金沢大学総合教育一号館会議室において、本センター主催の第2回講演会を開催しました。CEFRの理念と実践について、理解を深めることができ、大変有意義な講演会でした。

外国語教育と複言語主義

西山先生には、CEFRの二大構成要素であるCan-do表等の到達度評価と複言語主義のうち、複言語主義について、次のような点を中心にお話頂きました。1) 学習者を複数の言語（方言や年代ごとの言葉を含む）の異なる能力（会話に参加する、聞く、読む、書くなど）が複層的に混じり合った存在と捉える。2) 言語学習や異文化理解学習の場を教育機関に限るのではなく、学内外で生涯にわたって習得する言語能力を対象とする。3) いわゆる四技能すべて揃わなくても、それぞれ必要とされる技能を習得していればそれを部分能力として積極的に評価する。4) 語学や語学教育についての考え方（表象）自体を、より多様な言語・文化を尊重する民主的市

民の育成へとつなげていく。5) 異文化体験や学習方略は、ひとつの言語で得たことを他の言語や体験に応用できるので、言語横断的な取り組みを語学教育に取り入れられる。



外国語教育における学習ポートフォリオの活用 —初級フランス語における導入のころみ—

福島先生は、まず欧州言語ポートフォリオに基づき語学学習ポートフォリオを構成する3つの部分についてお話されました。1) 「言語パスポート」は言語能力の自己評価や他者評価により欧州内を移動しても共通の尺度で学習者の語学力を測れる。2) 「言語学習記録」は学習者が学習目標を決めたり自分の

学習をふり返ることで、自律的に学習プロセスを評価するための記録である。3) 「関連資料」は学習者が特に残しておきたい作品等である。また、到達基準や達成度評価に用いられる「ルーブリック」（Can-do表記などで書かれた表）が、ポートフォリオでは学習者のふりかえりのための道具となっている、と説明がありました。後半は、実際に先生が使っておられる自己点検シート型ポートフォリオや授業の様子を紹介して頂きました。学生が楽しそうに学ぶ福島先生の授業実践から、「学び」を学習者と教員・他の学習者・社会との相互行為の中で生じる社会的な産物ととらえる構築主義の考え方についても、具体的に理解することができました。

（大藪加奈記）



研究会

TTT (TOEIC 指導者研修) から考える、教室内活動と教材分析の実践

西 嶋 愉 一 (外国語教育研究センター) (5月25日)

発表者はTTT (TOEIC Teachers' Training、例年2月に行われるTOEIC指導者研修) に継続的に参加しています。本研究会では、参加報告を兼ねて、TTTの軸になる考え方を中心に発表を行いました。

TOEIC対策に限らず、クラスを成功させるには、教員が学生の信頼を獲得すること、さらに自発的行動に繋げて成果を出すことが重要です。授業においては、効果を短時間で体感できる教室内活動を適切に使うことで、信頼構築、そして行動に結びつけることができます。こうした考えかたから編み出された活動を3種類(音読の効果、英語のリズム、タイムマネジメント)ご紹介しました。

これに加え、TOEIC教材分析の手法を、実例を用いてご紹介しました。

TOEICを題材にしましたが、取り上げた考え方は

多くの分野に共通するものです。実際、ここでご紹介した教室内活動を中国語の授業で取り入れている、という例をお聞きました。一部でもヒントにしていいただければ幸いです。(西嶋愉一記)



学生中心の授業作り — 授業参観とクリッカー —

青 野 透 (大学教育開発・支援センター) (6月22日)

大学設置基準の大綱化(1991年)以降、授業内容改善研究(FD)のための授業参観がいくつかの大学によって始まり、さらにFD義務化により、その数は増えてきており、青野教授は今回、その先進的な事例を紹介しました。ただし、初等・中等教育にくらべ、大学での授業参観が必ずしも一般化されていない現状を指摘、それに代わる授業研究の方法のひとつとして、クリッカーの活用を提案しました。

授業中、スイッチ(クリック)ひとつで学生の理解度や賛否を問うことのできるクリッカーは、学生参加型の授業を作り、教員にとってリアルタイムで授業内容や方法を検討することを可能にします。青野教授はご自身の授業で実践された経験をもとに、効果的なクリッカーの活用方法や学生の反応について紹介しました。

その後の質疑応答では、外国語の授業でクリッカーを使うことの可能性や意義について、活発な議論が展開されました。(佐藤文彦記)



派遣留学の現状と課題 — 教職員向けの派遣留学説明会 —

齊木 麻利子 (留学生センター) 西田 麻子 (学生部学務課留学生第一係)
矢淵 孝良 (外国語教育研究センター) (7月13日)

本学から海外の交流協定校へ派遣留学する学生は、協定校の増加に比例してとは言えないものの、確実に増えています。そのためか、派遣留学について教員からの問合せも多くなっています。そこで本センターの研究会を利用して、教職員を対象とする派遣留学説明会を開きました。

まず派遣留学の現状について西田さんの説明があり、ついで齊木先生から留学希望者の語学能力（特にTOEFLのスコア）について、さらに矢淵から指導上の留意点について説明がありました。TOEFLはiBTの受験を勧めることが学生のためになること、推薦書を書くだけでなく、学生の計画書を読んで指導してほしいことなどが力説されました。その後、派遣留学を増やす方策について意見交換がありました。(矢淵孝良記)



CEFR表を使った語学授業レベルのアンケート

大藪 加奈 (外国語教育研究センター) (11月30日)

本センターでは来年度、ヨーロッパを中心に普及しつつあるCEFR（ヨーロッパ共通言語参照枠）のレベル表記が本学の語学教育にも有効であるかどうかを調査するため、大規模な学生アンケートの実施を予定しています。

今回の研究会では、大藪加奈教授が本年度前期に英語科目で行なわれたパイロットアンケートの集計結果を報告し、引き続きアンケートを今後本格的に実施するための方策について、各言語科目担当教員との意見交換が行なわれました。(佐藤文彦記)



教育改善事業

教育開発企画部の主な活動は授業で用いられる教材、機器の購入支援である。従来授業の開始時に間に合わないことがしばしば生じたので、今年度は余裕を持って言語担当教員（非常勤講師を含む）に希望の有無を問い合わせた。本年度は授業で使用するCD（ドイツ語の歌唱）、ラミネーター、小型カセットレコーダーなどを購入した。今年特に強く感じたことは、カセットテープ、VHSビデオ、など旧式の機器が製造中止となり、入手が非常に困難な状況になっていることである。旧式の機器にも捨てがたいメリットがあるので残念なことである。

（渡邊明敏記）

e-learning活動

本センターで運用している英語e-learning教材ALC NetAcademy2に、新しいコースが導入されました。「技術英語パワーアップコース」です。これは自然科学研究科のイノベーション創出若手研究人材養成事業の一環として導入されたものですが、NetAcademy2利用者は誰でも使うことができます。

また、2012年3月までの期間限定ですが、NetAcademy2のほとんどすべてのコースが利用できるようになっています。英語入門、英文法、基礎英語、さらに医学英語コースなど、さまざまな学習ニーズに対応したコースがあります。ご活用いただければ幸いです。

（西嶋愉一記）

英語の特設プログラム

外国語教育研究センターでは一昨年より、共通教育科目「英語II」「英語III」の履修をとおして学生が高度で実践的な英語運用能力を身につけることのできる教育プログラムを検討してきました。その背景には、学生の卒業時の英語力を高めたいという想いがありました。1年次で英語の必要単位を充たし、その後英語を学習する機会を持たない学生は、少なくありません。また、「英語II」「英語III」は内容が多様であるにもかかわらず、学生の関心を十

分に集めているといえない、という状況を改善する必要性も認識されてきました。そこで、在学中の継続的な英語学習を促す仕組みとして、「英語II」「英語III」を体系的に利用したプログラムの作成を検討してきました。

このような本センターの動きは、共通教育機構が構想する「共通教育特設プログラム」と理念を共有するものでした。そこで本年度、英語のプログラムを共通教育特設プログラムに位置づけるかたちで更に検討を重ね、「英語ステップアップ」と「英語国際コミュニケーション」という2つのプログラムを作りました。概要は次のとおりです。

○共通教育特設プログラム「英語ステップアップ」
（修了要件：10単位以上、申請する科目のGPAが2.0以上）

継続的な学習により卒業後に活用できる英語運用能力の養成を目的とする。

○共通教育特設プログラム「英語国際コミュニケーション」
（修了要件：20単位以上、申請する科目のGPAが2.0以上）

英語使用環境で通用する英語力の向上を目的とする。

この2つのプログラムを構築するにあたり、「英語II」「英語III」の内容をより明確に示すために、来年度より「英語II（プレゼンテーション）」「英語III（専門セミナー）」という具合にサブタイトルを付けることにしました。新しい仕組みが学生の計画的で継続的な英語学習を促すものになるよう、点検と検討を重ねたいと思います。

（結城正美記）

検定試験・検定模擬試験

【TOEFL】

本年度はTOEFL-iBTを3回(9月18日、2月20日、3月26日)行いました。本稿執筆時点では3月の人数は出ていませんが、9月、2月とも申し込みは定員いっぱい(16名(当日受験者は9月が16名、2月は13名))でした。

テストの日程や申し込み開始の日時などの情報は、全学に向けて公平に出すためにアカンサスポータルを使うことになりました。アカンサスポータルの「ACaNeCo (SNS)」内にある「TOEFL-iBT」コミュニティに最新の情報を掲載しています。TOEFL受験を希望する人は、このコミュニティに参加の上、掲載されている情報を定期的に確認してください。(西嶋愉一記)

【ドイツ語技能検定試験】

2010年度秋期ドイツ語技能検定試験(独検)は、11月23日に本学総合教育講義棟で行なわれた。春期の金沢星稜大学ともども、北陸三県では唯一の試験場である。本学学生の級別受験者数と合格者数(括弧内)を以下に挙げる。

	春期	秋期	合計
1 級		1 (0)	1 (0)
準1 級		2 (2)	2 (2)
2 級	6 (4)	5 (2)	11 (6)
3 級	7 (1)	16 (12)	23 (13)
4 級	0 (0)	5 (4)	5 (4)
5 級	0 (0)	0 (0)	0 (0)
合 計	13 (5)	29 (20)	42 (25)

昨年度に比べ、受験者総数・合格者数ともに10名減は寂しい気がする。とくに2級は受験者総数で8名減、合格者数も6名減少した。例年だと夏期語学研修の参加者が、秋期の独検で2級を受験することが多かったものの、今年度は3級を受験する者が目立った。他方、1級への挑戦者および準1級合格者が出たことは喜ばしい。彼らはともに1年間の派遣留学を終えたばかりの学生だった。今後の課題はやはりその中間に当たる2級受験者の掘り起こしであろう。(佐藤文彦記)

【フランス語検定模擬試験】

2010年度実用フランス語技能検定試験の日程に合

わせ、春は6月16、17日、秋は11月17、18日に、3・4・5級の模擬試験を実施した。参加者は3級6名、4級5名であった。学生たちは授業やサークル活動、アルバイト等で忙しく、多くの学生が参加できる時間帯を見つけるのは難しくなっている。そろそろ違った形のサポートを考えるべき時期に来ているかもしれない。

仏検受験者の方は昨年度にくらべて9名増え、延べ75名であった(下記の表参照、括弧内は合格者数)。フランス語履修者が減少傾向にある中、仏検を活用して積極的に学ぶ姿勢を持った学生が育ちつつあるのはうれしいことである。今後もより丁寧な情報提供につとめ、学生たちの自律的な学習を促してゆきたい。(三上純子記)

	春季 (6/20)	秋季 (11/21)	合計
準1 級		3 (1)	3 (1)
2 級	2 (0)	2 (1)	4 (1)
準2 級	7 (5)	5 (4)	12 (9)
3 級	11 (10)	10 (8)	21 (18)
4 級	9 (5)	19 (17)	28 (22)
5 級	1 (0)	6 (5)	7 (5)
合 計	30 (20)	45 (36)	75 (56)

【中国語検定試験】

2010年度、中国語検定試験は例年通り日本中国語検定協会の実施に合わせて計三回行なった。受験者総数は前年度比6名増、合格者数も5名増という結果となった。今年度特徴的なのは、4級受験者の多さである。昨年度より11名も増えているが、これは中国語履修者の腕試しだけでなく、外部試験による単位認定を見据えた受験者もいるためのようである。

一方、3級受験者は相当苦戦を強いられている。リスニングと筆記にそれぞれ合格基準点があることで、受験者はリスニングで躓き、結果不合格になっているケースが多い。今後、3級受験相当の学習者へのサポートを考える必要があるだろう。

各回の級別受験者数は以下の通り。括弧内は合格者数である。(杉村安幾子記)

	第70回 (3/28)	第71回 (6/27)	第72回 (11/28)	合 計
準1 級	1 (0)	0	1 (0)	2 (0)
2 級	2 (0)	5 (2)	3 (0)	10 (2)
3 級	12 (1)	7 (2)	6 (3)	25 (6)
4 級	13 (7)	5 (2)	6 (5)	24 (14)
準4 級	0	0	4 (4)	4 (4)
合 計	28 (8)	17 (6)	20 (12)	65 (26)

留学支援事業

【留学準備授業】

今年度は英語Ⅱと英語Ⅲで留学準備クラスを14科目開講しました。その内訳は、TOEFL 準備クラス（7コマ）、異文化適応対策クラス（2コマ）、そして外国人留学生とのジョイントクラス（5コマ）です。ジョイントクラスには、留学希望の学生と共に、留学帰りの学生もおり、留学に関するノウハウを伝授してくれます。また、留学予定（希望）の協定校からの交換留学生と授業をとおして親しくなり、留学先で交流を続ける学生もいました。

（大藪加奈記）

【エジンバラ大学語学研修】

英国スコットランド、エジンバラ大学の研修（夏期・春期）には、15名が参加しました。文化体験重視の研修なので、学生たちはホストファミリーに滞在し、研修先が提供するツアーや行事に参加しました。英語を学ぶだけでなく、世界遺産都市エジンバラが提供する文化（舞台芸術、建築、美術館・博物館、スポーツ、食べ物飲み物等）やスコットランドの自然に触れて3週間を過ごし、ロンドン観光も行いました。

事前学習では、海外で起こりうる危険について学習し、英語でシミュレーションやロール・プレイを行いました。東北・関東大震災（3月11日）により、3月12日出発予定だった15名の3月研修は中止になりました。

（大藪加奈記）

【ワシントン大学語学研修】

シアトルの美しいキャンパスで開かれる語学研修、今年度は本学より計5名の学生が参加しました。

- セッション3（8/16～9/3）参加者：4名
〔国際学類2年：2名、法学類2年：1名、自然科学研究科M2：1名〕
- セッション4（9/7～9/24）参加者：1名
〔医学類2年：1名〕

セッション3はLanguage&Cultureというプログラムで、午前中にリスニングとスピーキングを中心とする英語のトレーニング、午後は文化体験を目的とした街めぐりなどをおこなうというかたちで構成されています。セッション4は今回新たに加わったOrientation to Academic Skillsというプログラム

で、大学留学を目指す学生を対象にしています。ワシントン大学語学研修は年々充実しており、日程や目的にあわせてプログラムを選択できるのが魅力の一つです。

（結城正美記）

【ハワイ大学語学研修】

ホノルルのハワイ大学マノア校を会場とする3週間の語学研修は、8月と2月に開かれ、本学からはそれぞれ3名と9名の計12名が参加しました。受講生の所属学類・学部と学年は表のとおりです。

年	学類	国際	人文	学校教育	保健	計
1		5			1	6
2		4	1	1		6
計		9	1	1	1	12

研修は、午前中は口頭表現力向上を目指した英語のトレーニング、午後は文化体験という内容です。現地の研修で最大限の効果を得るために、渡米前に口頭表現のトレーニングを積みました。フレンドリーな学習・生活環境、美しい海と山、そしてアメリカのなかでも最も豊かな異文化環境を誇るホノルルで、学生たちは、授業はもちろんのことホストファミリーとの交流をとおして、英語による異文化コミュニケーションの感触を確実につかんだようです。

（結城正美記）

【モナシュ大学語学研修】

オーストラリア、メルボルンのモナシュ大学での語学研修には、今年度は前期2名、後期4名が参加しました。クラス分け試験を経て個々のレベルにあった学術英語養成集中コースを5週間受講し、実際に英語圏の大学の授業で必要とされる学術能力習得の土台づくりをしました。また、イギリス、オーストラリアの大学入学用の語学試験IELTSを研修の最後に受験することで自らの学習到達度を確認することができました。入学基準には達しませんでした。将来派遣留学を目指す学生には良い刺激となったようです。さらに、選択科目となるワークショップやフィールドワークの受講、および学内のIndependent Learning Centreにおいて e-learning を使った自主学習を行うことで自律学習能力を高め、自らの学習法をモニタリングし、帰国後の英語学習を体系的に進める方法論を身につけました。

（根本浩行記）

社会貢献事業

英語指導力開発ワークショップ

本センター主催の「英語指導力開発ワークショップ」を平成23年2月11日・12日に実施しました。平成19年度文部科学省委嘱事業として始まった本ワークショップも4回目を数え、センターの社会貢献事業の大きな柱となっています。連休中にもかかわらず募集数の20名を超える応募があり、以前の参加者が再度参加される例も増えています。

今年度のテーマは「生徒の自律学習力を高めるー Can-Do表と語学学習ポートフォリオの活用ー」で、近年日本でも注目されるCEFR（ヨーロッパ共通言語参照枠）と語学学習ポートフォリオの活用について考え、実際に小・中・高のグループでCan-Do表とポートフォリオの案を作成しました。研修は本センターの大藪、数見、Bintliff、Ertl各教員と複数の母語話者インストラクターが担当し、3～4名のグループごとに母語話者がついて活動をサポートしました。参加者は休憩も惜しむほど熱心に取り組む、充実した研修となりました。英語指導力における成果に加え、リフレッシュ効果や小・中・高・大の教員の交流の場としての意義も大きいと感じます。

昨年度から金沢市と金沢大学の連携事業となり、その一環として、ワークショップの資料や活動の様子を閲覧できるサイトを作成する予定です。当日参加できなかった方々への情報提供も可能となり、地域の英語教育に携わるより多くの方々に本ワークショップを役立てていただければと思います。

(数見由紀子記)



公開講座

今年度の公開講座は「各国の伝説・物語」のテーマで6月に5回行いました。

- 第一回 「イギリスの伝説・物語」 大藪加奈
- 第二回 「中国の伝説・物語」 趙 菁
- 第三回 「古代ローマ建国の伝説・物語」 渡邊明敏
- 第四回 「ドイツ語圏の伝説・物語」 佐藤文彦
- 第五回 「アメリカ開拓期の伝説・物語」 アートル・ジョン

各国に伝承される物語・伝説に触れ、その登場人物や歴史事象の描かれ方などから、各国の文化や歴史観を学ぶという趣旨です。当センター担当の講座は例年人気が高いという事で、今年より広い会場に移り、受講者は44名、約半数はリピーターの方でした。

受講者のアンケートによると、9割以上の方が内容や説明のしかたに満足されているようでした。「『各国のお国事情』シリーズをさらに発展させて下さい。」と励まして下さる方や、「おもしろい内容なので、もう少し時間が長ければいい」と言って下さる受講者もいましたので、今後ますます充実した講座を提供したいと思います。(大藪加奈記)



金沢市との連携事業

金沢大学と金沢市との包括協定に基づく連携事業として、本センターは教育委員会学校指導課と協力して「小中一貫英語教育充実発展プロジェクト」を実施することになった。今年度は「英語指導力開発ワークショップ」(前出)と「外国人留学生と小学生の交流」を二本柱とし、本センターおよび留学生センターが市教委と連携して実施した。このプロジェクトが近い将来、異文化理解に関心をもち、英語の運用能力にすぐれた学生の本学への進学につながることを期待している。(矢淵孝良記)

その他の活動

理工学域・自然科学研究科FDシンポジウム「英語による授業のノウハウ」

2011年3月15日に「英語による授業のノウハウ」をテーマとする理工学域・自然科学研究科第3回FDシンポジウムが開催され、本センターの澤田茂保センター長と大藪加奈教授が講師として参加しました。

「書くことから話すことへ — written/spokenの違い —」

英語で文献を読んだり、論文を書いたり、日常的な研究活動でいろいろと英語に触れているのに、話すとなるとときこちない気



持ちになる、といった印象を持っている人が多い。目に見えない読者を対象に時間をかけて推敲された英語 (written language) と、相手と対面しながら、考える余裕がないreal-timeでクチから出る英語 (spoken language) とは若干異なること、伝えたい内容があれば、それを話し言葉のフレームに乗せて、分かりやすく伝えるためのポイントなどを話した。(澤田茂保記)

「国際化する教室 — 留学生の授業や

日本人との混在クラスを教える —」

大藪は、自分の経験と英語授業についての研修で得た内容について話した。

まず英語授業でおこりがちな問題を紹介し、次に学域・学類、教員、学生がそれぞれ英語授業のためにできる事として、英語授業をするための環境整備や、授業運営のしかた、授業形態や学習方法について話した。学生の混乱を防ぐために、学類で統一・周知できる部分は統一・周知する、シラバスには学生が指示に従わなかった場合のペナルティーも必ず書く、学生中心の授業運営で教員の負担を減らすなど、大藪の経験で有効と思われる事を中心に具体的に説明した。(大藪加奈記)



ランチョンセミナー

大学教育開発・支援センター主催の2010年度「角間ランチョンセミナー」において、本センタースタッフが「外国語学習特集」の7回のミニ講義を担当した。朝鮮語については、6月2日(水)に非常勤講師の宋有宰先生にお話をいただいた。

(佐藤文彦記)

第35回 6月3日(木)

フランス語の魅力と学び方

三上 純子

第36回 6月4日(金)

中国語の魅力と学び方

杉村 安幾子

第37回 6月7日(月)

ドイツ語の魅力と学び方

佐藤 文彦

第38回 6月8日(火)

ラテン語の魅力と学び方

渡邊 明敏

第39回 6月9日(水)

大学からの英語学習

澤田 茂保

第40回 6月10日(木)

今日から始めるTOEIC対策

西嶋 愉一

第41回 6月11日(金)

英語海外語学研修の紹介—参加者の声を聞こう!

大藪 加奈

海外留学フェア2010

6月25日に留学生センター主催の「海外留学フェア2010」が総合教育棟で開催され、本センターの教員が留学相談コーナーとTOEFL-iBTコーナーを担当した。来場者の派遣留学・語学研修などの相談に応じ、TOEFL-iBTの教材について説明を行った。

(數見由紀子記)



センター刊行物／購入語学教材

学習支援冊子

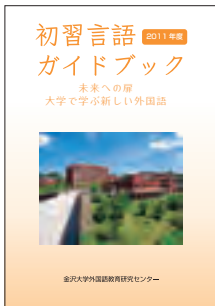
『英語学習ハンドブック』（2011年度版）



大学での効果的な英語学習に役立つ情報や履修のアドバイスなどを収録

◎新入生に配付

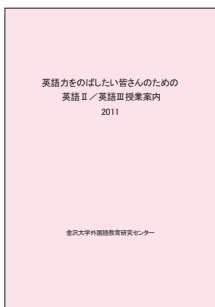
『初習言語ガイドブック』（2011年度版）



本学で開講している初習言語の紹介や履修上の注意などを収録

◎新入生に配付

『英語力をのばしたい皆さんのための英語Ⅱ／英語Ⅲ授業案内』（2011年度版）



英語Ⅱ・英語Ⅲを目的や関心ごとに分類した授業案内

◎学務係で希望者に配付

紀要

『言語文化論叢』第15号

外国語教育法、外国語学・外国語文学、異文化コミュニケーションに関する論文等を掲載

『外国語教育フォーラム』第5号

外国語教育に関する論文、授業実践報告等を掲載

語学教材 [2010年度購入分]

英語

- ・ ENGLISH JOURNAL (CD付)
- ・ CNN ENGLISH EXPRESS (CD付)
- ・ 英検1級 全問題集 2010年版 (CD付)
- ・ TOEFLテスト完全対策&模試
- ・ TOEICテスト 本番攻略 リーディング 10回模試 他 155点

ドイツ語

- ・ 独検過去問題集 2010年度版
- ・ しっかり身につくドイツ語トレーニングブック
- ・ 大学1・2年生のためのすぐわかるドイツ語 読解編
- ・ 本気で学ぶドイツ語 他 6点

フランス語

- ・ 実用フランス語技能検定試験 2010年度版 1級 (CD付)
- ・ フランス語発音トレーニング
- ・ 楽勝－仏検準2級合格講座
- ・ CD付フランス語スピーキング 他 11点

中国語

- ・ 中国語ジャーナル (CD付)
- ・ 聴く中国語 (CD付)
- ・ 中検準1級・1級問題集 2010年度版 (CD付) 他 4点

韓国語

- ・ 韓国語ジャーナル (CD付)
- ・ ハングル能力検定試験 過去問題集 第5巻 1級
- ・ 日本語と韓国語の慣用表現の差異 他 17点

その他

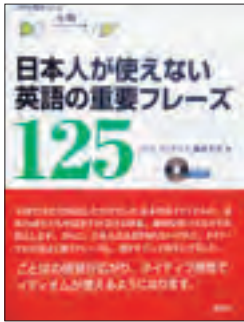
- ・ スペイン語技能検定試験問題集9
- ・ ロシア語会話「決まり文句」600
- ・ ニューエクスプレス モンゴル語
- ・ くわしく知りたいベトナム語文法 他 11点

教材紹介

英語

『日本人が使えない英語の重要フレーズ125』

(ジョン・ビントリフ、森田久司著、研究社)



今回は10月に外国語教育研究センターの教員として着任されたビントリフ先生の著書を紹介します。英語は語彙数が多いだけではなく慣用的なフレーズが非常にたくさんあり、しかも頻繁に用いられます。この本には重要でありながら覚えにくく間違えやすい表現が選ばれています。

すべての項目について、構成要素の基本的意味に遡って説明しており、「なるほど」と納得した上で記憶することができます。上級者向けとして同じ著者による「日本人が知らない英語の必須フレーズ150」があります。(渡邊明敏記)

ロシア語

『ロシア語の通になるための一ロシア語会話「決まり文句」600』

(山下万里子著、語研)



どんな言語も、基礎を学んだ後はその言葉を実践的な場でコミュニケーションに使ってみたいと思うものです。この本も旅行を念頭においた実践会話を目的にしたものです。ロシア語の基礎を学び会話にも興味が芽生えてきた学生たちは、会話表現の獲得により、ロシア旅行やロシア留学を強く意識するようになるかもしれません。著者は「本書には、最新情報を基に、ロシア人が使う生きた表現を豊富に取り入れました」として、「これからロシアを訪問される方、ロシア人と会話をしてみたいという方々に大変役立つことと思います」と、この本のメリットを説明しています。

(吉川顯磨記)

韓国語

『韓国語 似ている動詞 使い分けブック』

(河村光雅ほか著、ベレ出版)



日韓両言語は非常に似ていると言われていますが、よく似た単語の間で文脈に合った正しい単語はどちらなのか迷うことがあります。例えば、日本語の「会う」にあたる動詞は「만나다」ですが、「出会う」「デートする」意味として多く使われます。しかし、会う約束をしてもないのにばったり会う場合は「모두」が多く使われます。このような使い分けに悩まされる韓国語学習者のために作られたのが本書です。日本語をベースにした発想から生じてしまう間違いにはどんなものがあるのかに焦点を当てて解説した学習書なので、是非読んでみてください。

(宋有宰記)

スペイン語

『いっそイラスト・スペイン語単語帳』

(酒井うらら著 小学館)



本書は人びと・暮らしなど11のテーマに分け単語を紹介し、各テーマは一枚のストーリーとして描かれています。例えば暮らしの場面は時間帯でくぎられ簡単な会話も含まれており、パターンとして覚えることができます。

スペイン語はほぼローマ字読みの親しみやすい言語です。イントネーションを押えるのは大事な要点でありアクセント部分が濃く示されているこの単語帳はとても便利ではないでしょうか。

絵で言葉のイメージをつかみ、単語と場面を目で覚え、繰り返し発音して暗記することをお勧めします。(雄谷ソニア啓子記)



外国語教育研究センター年報 2010年度

2011年3月発行

金沢大学外国語教育研究センター 広報・社会貢献企画部編

920-1192 金沢市角間町

電話：076-264-5760 fax：264-5993

<http://fliwww.ge.kanazawa-u.ac.jp/>

flijimu@ge.kanazawa-u.ac.jp

